

山海塾作品《卵を立てることから—卵熱》における空間演出

—「奥」の概念を中心に—

お茶の水女子大学大学院生 塩田 靖子

1. 研究目的

山海塾は、1975年に天児牛大(1949-)を中心として創立された。1980年海外に進出し、世界の主要芸術フェスティバルに招待され、37カ国のべ700都市での公演を行う。1982年以降は、パリ市立劇場にて新作を発表し続けている。

本稿は、先行研究¹に引き続き、山海塾作品《卵を立てることから—卵熱》(1986)(以下《卵熱》)の空間演出について研究を行う。そして、主に日本の建築空間における「奥」の概念から、山海塾作品《卵熱》の空間演出の特徴を導き出し考察することを目的とする。

2. 「奥」の概念について

「奥」は日本独特の空間概念と言われる。建築家の槇文彦氏によると、「奥」は土地を畏敬する姿勢から生まれ、歴史的に日本の農村や都市の形成と深く関わり、それは地域社会が潜在的に持つ空間イメージであることが指摘されている²。

日本では、山の頂きよりも人目につき難い山の奥深くに奥宮を設け、その「奥」に到達するためには険しく屈折した山道しか与えられていない。そこには到達することよりもむしろその過程が重視されるといった、高さではなく水平的な見えざる深さの演出がある。また、町屋においては、ケに属する出入口とハレに属する奥座敷の間の斜めの方向性、加えて表と裏という領域を重ねることで「奥」へのより多面的な空間を演出している。その他の「奥」の表現としては、能舞台の橋掛りや日本の建築における雁行形の配置等がある。

空間において「奥」は奥行という概念を内包し、それに深く関わっている。この奥行とは限られた空間の中で相対的に遠近の差を設定することである。日本人は、相対的に「奥」を認識し、「奥」に至る錯綜化した過程を求心的に作り出すことで、狭小な空間を深化させてきた。加えて、「奥」は抽象的に奥深い、事が深遠で測りがたいという意を含む点に特徴がある。即ち、物理的な空間の距離だけでなく、心理的なものの表現でもある。

3. 山海塾作品《卵熱》の空間演出にみる「奥」の概念

《卵熱》の空間演出において、舞台の中央部分の水を張った領域(以下 水の領域)を中心とした、空間深化のための5つの特徴が導き出され、「奥」の概念との類似性が考察された。

(1) 床面を原点とする天児の思考による「第5

の壁」の意識化：天児は舞台を囲む三方の壁、客席との間の目に見えない第4の壁に対し、舞台床面を「第5の壁」と捉え、床面を重視する空間演出を行ってきた。これは、「奥」の概念が土地を畏敬する姿勢から生じたとすることに類似している。そして、舞台床面を基礎とし、その変化によって空間を作り出そうとする姿勢は、日本の建築空間の特徴とも重なるものである。

(2) 水の領域と卵を立てた空間により暗示される水平性：水の領域には水面、即ち透明な水平面が存在しており、それは静かな緊張感を保った水平性を象徴する。その水面に足を踏み入れることで広がる波紋は、水平に広がる感覚を生み出す。加えて、水平的志向がみられる「すり足」が引き出されるという、卵を立てた空間が演出されている。これらの静かな緊張感は、運動エネルギーを内側に溜め込む、あるいは床面に同調するような水平的な動きの展開を引き出している。

(3) 床面から更に水の領域(中心領域)に限定し、その領域に対する様々な方向や段階により距離を拡大された過程：舞台床面を更に水の領域に限定することで、中心となる領域を設定する。そして、場面I³の冒頭から、天児によって3つの方向と段階、次に4人の群舞によって5つの方向と段階を経ることで、多様な空間軸を作り出し、距離が拡大され、水の領域に向かって求心的に空間が深められている。

(4) 中心領域内における斜め方向の強調と、中心領域の入口に対する極点が位置する斜めの方向性：水が張られた中心領域内では、水と砂の小滝へ向かう斜めの直線的な照明が映し出される。そこを、能舞台の橋掛りのように、天児が移動することで、空間的な奥行きと時間の移り変わりが表されている。また、天児において、その中心領域の入口に対して最終地点(極点)である砂の小滝は、斜めの方向に位置するという「奥」独特の座を備えている。

(5) 天児のソロと4人の群舞が交互に少しずつ重なりながら進行する作品展開：《卵熱》は、天児のソロと4人の群舞が交互に展開することで成り立っている。両者は少し重なったり、相互に関係性を持つという重層的な作品展開がみられる。このような作品展開は、日本の建築空間における雁行形のように、時間が移り行きながら、空間の奥行きが表現され、「奥」の形成へと向かっている。

1 拙著、2003、「山海塾作品『卵を立てることから—卵熱』における空間演出—枯山水との比較より」、『人間文化論叢』第5巻、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、東京、pp.365-378。

2 槇文彦、1997、『記憶の形象』、筑摩書房、東京。

3 作品は約90分間で、7つの場面から構成される。場面I(0-19:42)は、天児そして4人の群舞の登場が中心となっている。